

〈悪〉から〈害〉へ

ハーム・リダクションと逸脱処遇の現代の変容

関西学院大学 佐藤哲彦

本報告の目的は、過去 30 年にわたって欧州を中心に発達し、最近では世界的にも受け入れられつつあるハーム・リダクション(HR)という薬物をめぐる処遇・施策について、とくにその思想と実践がどのような状況と経路で発展したのかについて記述し、その含意を考察することである。今回はとくにその初期の発想と実践にかかわった欧州各国の運動家・実務家・研究者など 30 人以上へのインタビュー調査を踏まえて、その処遇・施策の発達の概要を報告し、それをもとに HR の普及に関する社会的含意について検討する。

① HR をめぐる近年の諸言説と諸研究——本報告の前提 HR とは何か。今日それは薬物使用へのある介入の仕方であり、具体的には注射器交換(NSPs)、置換療法(OST)、カウンセリング、薬物使用施設(DSRs)、さらにピア・エデュケーションや薬物使用をめぐる健康政策などの諸要素で構成される使用者処遇のことを指す。すなわち「ハーム・リダクションとは、個人、コミュニティ、社会への健康上の害、社会的な害、経済的な害を減らす介入、プログラム、政策を含むものである。その核となる原則は、継続的な薬物使用によって生じる健康に関連する害を減らすことに優先的に重きを置く段階的介入を通じた、薬物使用に対するプラグマティックな応答を発達させることである。そのアプローチは、薬物を一切使わなくさせる治療のゴールを排除するものではないし、逆にそれを正しいとするわけでもない。すなわち、薬物を一切使わなくさせる介入もまた、ハーム・リダクションのゴールの段階制の中に位置づけられるということである。そこで我々はハーム・リダクションを『介入のコンビネーション』とみなし、それを薬物使用の害を減らすことを第一義的に強調するローカルな状況とその必要性に合わせて作られた介入のパッケージからなるものと考えている」(Rhodes and Hedrich 2010: 19)。現代の HR を考える上での最重要テキストにおける編者らのこの説明は、しかしそれが 2010 年の言明である点に注意しなくてはならない。これは定義というよりもむしろ一種の宣言であり、それが置かれた文脈における遂行性の観点から理解する必要がある。というのも、過去 30 年以上にわたる HR の発展は「薬物を一切使わなくさせる介入」が現実的ではないとして、それを批判するプラグマティックな対応を示しているからである。一方、HR に関する犯罪社会学的分析の多くはこれをリスク論的な主体の管理として批判的に説明する(本田 2006 など)。ただし、いずれもが HR の発達経路を十分に検討した言明とは言いがたい。そこで重要なのは具体的な発達経路の記述であり、それを踏まえた議論であろう。

② HR の社会史とその含意——本報告の中心部分 薬物使用者組合の運動家らは HR を「自分たちの方法」と主張する。これもまた政治的言明だが、同時にそれが指示するのはオランダで発達した使用者のセルフヘルプ的活動であり HR の起源である。それが HIV/AIDS の流行により感染症予防として注目を集め、1980 年代の薬物政策といえばオランダ主導として有名となった。その後それが HIV 対策をすすめた英国に持ちこまれて HR と命名され発展し、さらに英国からスイスをはじめ欧州各地に伝達された。1990 年代の薬物政策といえばスイスが知られているのはその結果である。さらにその後スイスモデルはオランダに逆輸入され現在の HR が展開している。これらの過程では HIV/AIDS 流行と薬物使用の関係を重く見た各国の実務家や研究者同士が接続することで HR が伝達され、それが各地でローカルな状況に合わせた方法として発達すると同時に変容した。この過程で「新しい公衆衛生」思想が誕生し、各国の薬物政策や刑事政策も変化した。このような社会史的過程は、外側からは幾通りにも説明可能であろう。その一つとして上のようなリスク論的説明がある。しかし逸脱のリスク化という発想それ自体は諸状況にすでに埋め込まれており、むしろそれらエビデンスベースの思考・実践の相互接続とその連続性を、内側からどう記述し説明しうるのかが問われている。〈悪〉から〈害〉へという現代の変容と、そのリフレキシビリティを併せて考える視座が必要とされる。